

前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

1. イデオロギーとユートピア

1-1：リクール1

1-2：マルクスとマルクス主義

1-3：黙示的終末論の系譜

5/22

1-4：ティリッヒ1

5/29

1-5：ティリッヒ2

6/5

1-6：リクール2

6/12

1-7：知恵思想の視点から

6/19

1-8：パウロとローマ帝国

6/26

2. キリスト教社会主義

2-1：キリスト教社会主義の—イギリス・アメリカ・日本—

7/3

2-2：宗教社会主義—ティリッヒ—

7/10

2-3：賀川豊彦のキリスト教社会主義

7/17

2-4：解放の神学

7/24

Exkurs

キリスト教と仏教1

キリスト教と仏教2

<前回>

Exkurs

キリスト教と仏教

（キリスト教にとっての仏教の意味—近代日本・アジアの文脈から—）

<目次>

1. 問題

2. 土着化論の文脈で

3. 民衆宗教論の文脈で

4. 展望

1. 問題

1. 近代日本のキリスト教と仏教

・ 仏教との関わり合いは周辺的あるいは個人的レベルにとどまり、公式な取り組みは欠如している。

・ しかし、メイド・イン・ジャパンのキリスト教（マリンズ）では、持続的な関わりが存在してきた。無教会、松村、川合

2. マリンズ『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』

3. 第一波の土着運動

・ 内村鑑三(1861-1930)：無教会

・ 松村介石(1859-1939)：道会

・ 川合信水(1867-1962)：基督心宗教団

4. キリスト教宣教論の展開とアジア伝道

・佐藤敏夫『植村正久』新教出版社。

・カブ『対話を超えて』

5. 仏教の西欧世界への拡大

・アンナ・ルッジェリ

「日本宗教から世界へ——日本における禅仏教とヨーロッパでの展開」

6. 問題をどう立てるか

土着化論と民衆宗教論という二つの文脈において、「キリスト教にとっての仏教の意味」を論じたい。

土着化：土着化は、キリスト教にとってどのような意味があるか。

民衆宗教：現世利益や宗教混交といった問題をどう見るか。

2. 土着化論の文脈で

キリスト教と仏教というテーマは、キリスト教が東アジアにいかにか土着化できるのかという問いと関わる。先行する宗教としての仏教。

7. 日本における土着化宗教としての仏教というモデル：鈴木大拙の日本的靈性論

8. 課題としての土着化が仏教への関わりを動機づける。

・宗教研究のレベルでの継続的な取り組み。南山宗教文化研究所の研究成果より。

『キリスト教は仏教から何を学べるか』（第十回のシンポジウム内容）

ヤン・ヴァン・ブラフト：日本におけるキリスト教と仏教の対話の動機として次の三つをあげる。一つは「土着の動機」と呼ばれるもので、それは遠藤周作や井上洋治などの文学作品に現れている。キリスト教が身につけてきた西洋的知的衣が東洋人、日本人としての自分に合わないと感じるために、自分の信仰のより日本的な地盤を見つけない、という動機。二つ目は「対話的動機」であり、自分がキリスト者として、自分が囲まれて生きている仏教への神学的通路、橋渡しを作ろうという願望に発する。三つ目はギリシア的範疇や論理をもって表現された神学（とそれによって形作られた＜信仰と理性の対立＞）に対する不満に由来する、「キリスト教がただ西洋的なものばかりでなく、同時に東洋にふさわしいことを顕にしよう」とする願望。

9. しかし、土着化論で十分か、そもそもキリスト教にとって土着化は最終目的か。

・韓国キリスト教思想の二つの潮流：民衆の神学と土着化神学

10. ピエリスによる従来土着化論に対する批判

何のための土着化か、土着化はいかに行われるべきか。アジアの現実の中で。

・ option to follow Jesus; option to be poor; option for the poor.

in Jesus, God and the poor have formed an alliance against their common enemy: mammon.

・ "inculturation." I see the process of "becoming the local church of Asia" only as an accompaniment or a corollary to the process of "fulfilling the mission of evangelizing the (Asian) nations." mission to the poor.

The great (monastic) religions that antedate Christianity also claim to possess a message of liberation for the poor of Asia. . . . collaborators in a common mission.

・ every local church, being itself a people, is essentially an inculturated church. The relevant question to ask therefore, is: Whose culture does the official church reflect? Which is the same as asking, What social class is the church predominantly associated with?

To evangelize Asia is to evoke in the poor this liberative dimension of Asian religiousness,

Christian and non-Christian.

• the separation of religion from culture (as in Latin Christianity) and religion from philosophy (as in Hellenic Christianity) makes little sense in an Asia society.

The very word "inculturation," which is of Catholic origin and inspiration, is based on this culture-religion dichotomy of the Latins, in that it could, and often does, mean the insertion of "the Christian religion minus European culture" into an "Asian culture minus non-Christian religion."

• The vast majority of God's poor perceive their ultimate concern and symbolize their struggle for liberation in the idiom of non-Christian religions and cultures. Therefore, a theology that does not speak to or through this non-Christian peoplehood is an esoteric luxury of a Christian minority. Hence, we need a theology of religions that will expand the existing boundaries of orthodoxy as we enter into the liberative streams of other religions and cultures.

• inculturation and liberation, rightly understood, are two names for the same process!

What makes an Asian Christian community truly indigenous or "local" is its active and risky involvement with Asia's cultural history, which is now being shaped by its largely non-Christian majority.

・土着化は歴史において繰り返されてきたが、それは目的ではなく解放の結果である。より正確には、両者は一つのプロセスにおいて結びついている。アジアのマイノリティとしてのキリスト教は、この解放のためにこそ、諸宗教との関わりを必要とする（民衆の解放への希求は、キリスト教的ではない仕方では表現されており、それを聞き分ける必要がある）。しかし、貧しさからの解放という目標こそが、対話に適切かつ正しい方向性を与える、共通の課題を自覚するからこそ、キリスト教は仏教へと向かう必要がある。

高齢化・葬儀の問題、平和や環境の問題・・・

3. 民衆宗教論の文脈で

1. 野呂芳男『キリスト教と民衆仏教——十字架と蓮華』

三つの極、御利益宗教・宗教混交という批判を越えて

2. 「一つは、神学は人間の解放にかかわる、という確信である。伝統的に神による救いと言ってきた事柄は、解放以外の何ものでもない。そして、解放には幾つかの次元がある。政治的な解放、経済的な解放、社会的な解放、性差別よりの解放、非本来的な自己よりの解放などであって、実存論的神学はこれらすべての解放にかかわらねばならない。そして、キリスト教と他宗教とのかかわりは、実存の生きる姿勢と深くかかわるところの宗教的な解放、真に深く自己を生かす宗教の中へと日々解放されて行くことと結合している。」(3-4)

「第三の確信は、民衆宗教こそ、その納得できない多くの慣習の奥底で、この愛を至上のものとしてあこがれ求めている宗教性であるということである」(4)

「浄土仏教との対話こそ不可欠ではないかと私は考えてきた」「カブ氏の『対話を越えて』」(44)

「実存レベルでの宗教心を、この対話の中に挿入して来なければならない」、「大宗教内の集団の教理と実存レベルでの個人の信仰との間の緊張」(45)

「現世利益の信仰世界」「われわれの民衆の間での信仰は混淆されている」、「こういう混淆宗教においては、勿論のこと個人の信仰の方が大宗教の集団の信仰よりも優先されている

るのである」(46)

「これ迄は仏教とキリスト教というような二つの大宗教を両極に据えた、客観的な教理上の対話が学問の世界を賑わしてきたのであるが、個人信仰の多様性や民衆宗教をもう一つの極とする三角形の対話を展開する必要があるのではないか」(47)

第四章「十字架と蓮華」(124-235 頁)は、野呂と友人Aとの対話の形で、この三角形の対話を具体的に展開している。

3. 「カブが『対話を超えて』の中で結論として出しているものも仏教とキリスト教との両方に対して相手と混淆せよ、ということに外ならない」(48)

「勿論カブは親鸞の方便法身の思想を踏まえて」、「完全なるもの(阿彌陀如来)が不完全な者(菩薩)の姿で現れた訳であるが、それは、そうすることによって、人々が迷いの世から涅槃へと仏に救済された行く道程を具体的に示すためであった、というのである」、「阿彌陀如来の法蔵菩薩への受肉」(49)

「キリスト教の受肉神話は歴史に根差しているのである」(50)、「受肉の一回性」(51)

「浄土真宗自体の中で、阿彌陀如来、真如、涅槃を人格的な象徴で表わさざるを得ない要素と、無や空として人格的なものを排除する方向とが互いに緊張関係を保っているのではないかということである」(51)

「阿彌陀如来の神話に欠けている歴史性を補うものがナザレのイエスなのだから、浄土真宗の信徒たちもイエスをいつの日にか救い主として受け入れて貰いたいというカブの希望」、「キリスト教を統合の原理やホワイトヘッド哲学に依拠して理解しようとしても、私にはそういう媒介概念では漏れてしまう要素がキリスト教にはあると思える。それらの要素がまた、キリスト教の核と強く結合したものであると思えるのである」(53)

4. 「自分の信仰の核は、自分で発見しそれに賭けなければならないものであり、他人や大宗教が作ってくれるものではない。たまたま私の場合は、核がプロテスタントのキリスト教なのであり、浄土真宗からも栄養分をいただいたということである。こういう仕方では混淆したからと言って、プロテスタントの信仰の純粋性が失われた訳ではない」、「何も聖書に付加してはならないという論理は説得力がないからである。問題は付加されるものが、その信仰の核と矛盾せず、その信仰と有機的に結合し得て、その信仰を豊かにするかどうかである」、「実存レベルの民衆宗教の現世利益信仰に見られる仏教と、無や空に基づいて現世からの離脱を説く高遠な仏教哲学との間の乖離」、「涅槃と現世利益」(55)

「キリスト教のほうがこういう民衆宗教との靱帯を持ちやすいように私には見える。生きることへの執着が現世利益の追求の土台をなしているのだが、その執着は断って切れるようなものではない」、「キリスト教は生きることへの執着を基本的に肯定し、生きることもつ深みや広がりを見せようとする」(57)

「止むに止まれぬ仕方、愛さないわけには行かない人間の心」「疑いと迷いで深く傷つけられはしても、それには何とでも理屈をつけて、神や仏を愛することを止めようとはしない」(58)

「いわゆる神義論と呼ばれるもの」「人間がどうしても、いずこかに愛の神が欲しかったからではないのか」、「人々を愛し、自分の後生に執着するこういう人々が、御利益信仰の持ち主として軽蔑され神社や寺院や教会から見捨てられるなら、私もキリストの共にこれらの聖域の外にすることにしよう」(59)

5. W・C・スミスとJ・ヒック

「スミスは、世界の宗教史が一つのものであることを示そうとしたと言えよう」、「『聖人

伝』とロザリオ」(62)

「諸宗教は互いに交流してきたし、また、交流し得るものだという彼の主張」(65)

「人類には一つの宗教史しかない」(68)

「トレルチ」「宗教史を複数の宗教圏の個別な歴史の集合体と考える」(69)

「トレルチが歴史における個別的なものの重視、分析的な視点に立つとすれば、スミスは総合への視点に立っている」(70)

「複数の信仰が存在するのではなく、一つの信仰がそれぞれの伝統の中でキリスト教的な、イスラム的な、仏教的な形態を呈するのだ、と言う」、「一つの世界宗教史の神学」「比較宗教学的な神学」(73)

「比較検討の具体相」「宗教の検証原理」(75)

「指し示す強度に関し、両象徴間には程度の差がある筈である」(76)

「私は絶対という概念は、それ自体に対し他のものが並存することを許さないところの哲学的概念であって、キリスト教の愛と矛盾する独裁的概念であると常々考えている」、「このような統合の理念は、現実の中にある統合できない多くの不条理、宗教史の中にもある諸々の不条理に目覚めていない楽観主義だと言わざるを得ない」(77)

「ヒックのこの批判は正しいと私も思うが、しかし、他宗教にこのような価値を認めることは、どの宗教も等価値で在るとということにはいきなり繋がらない筈である」(85)

6. 「人格神と（非人格的な絶対たる）無や空が、スピリチュアリズムを媒介にして補完する傾向を見せているのである」、「十九世紀にアメリカから出発し、これはキリスト教の土壌に育ちつつ、ヒンズー教や仏教の影響を受けたものである」(86)

「今日、究極的なものとの触れ合いは、個人の魂の奥底においてなされるべきものであって、もはや集団を単位としたものではない」、「集団は個人に対して究極的なものを代表するものではなく、集団に属することが個人の信仰生活に益となる限り、それに所属してもよいところの便宜的なものとなる」、「生きて行く方便の場」(118)

「われわれは集団に対しては、忠誠心をもって臨むべきではなく——われわれが忠誠心をもつべきなのは、究極的なもの（神）に対してだけである——妥協をもって接しなければならない」、「普遍→個→種なのである」(121)

7. 山折哲雄『仏教民俗学』

「この問題については、仏教学の側にもすくなからざる責任があった。なぜなら近代の日本の仏教学は、あまりにも西欧の学問に秋波を送りつづけてきたからである。西方を凝視めつづけてきたというだけではない。海の彼方からばかり方法的な栄養をかすめとり、自己の存立基盤に思いをいたすにあまりにも乏しかったからである。日本の民俗的な土壌をそぎ落とし、分離することにばかり血道をあげてきたからである。その結果、日本の仏教学はいつのまにか地に足のつかない観念化の道をつつ走っていたのである。」

「仏教学よ、あらためて、民俗信仰が培ってきた知恵を呼び戻せ！」(6-7)

4. 展望

8. キリスト教と仏教との関係論をいかに意味ある形で構築できるか

9. 民衆宗教論から

大村の真宗カトリシズム、真宗ピューリタニズム論の評価

10. オバーセーカラ(Gananath Obeyesekere)の「プロテスタント仏教」(Protestant Buddhism)

11. 歴史的キリスト教→宗教類型の構築→仏教への適用

<参考文献>

1. マーク・R・マリンス『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（高崎恵訳）、トランスビュー、2005年。
2. 佐藤敏夫『植村正久とその弟子たち1 植村正久』新教出版社、1999年。
3. 石原謙「序説 東洋におけるプロテスタント・キリスト教」（『石原謙著作集第十巻 日本キリスト教史』岩波書店、9-26頁）
4. John B. Cobb, Jr., *Beyond Dialogue*, Fortress, 1983. (『対話を超えて——キリスト教と仏教の相互変革の展望』（延原時行訳）行路社。)
5. アンナ・ルッジェリ「日本宗教から世界へ——日本における禅仏教とヨーロッパでの展開」（芦名定道編『比較宗教学への招待——東アジアの視点から』晃洋書房、2006年、116-141頁）。
6. 芦名定道「日本的靈性とキリスト教——キリスト教土着化論との関連で」、北陸宗教学会『北陸宗教学文化』第24号、2011年、1-18頁。
「韓国キリスト教の死者儀礼」、『東アジアの死者の行方と葬儀』（アジア遊学）勉誠出版、2009年、96-104頁。
7. 南山宗教学文化研究所編『キリスト教が仏教から何を学べるか』法蔵館、1999年。
ヤン・ヴァン・ブラフト「オリエンテーション」
本多正昭「相即神学への道」
小田垣雅也「キリスト教と仏教——対話はどこで可能か」
武田龍精「浄土教・キリスト教の相互転換における方法論と可能性——親鸞浄土教の視座」
小野寺功「聖霊と場所——聖霊神学の基礎づけ」
八木誠一「直接経験の言語化について」
8. 『浄土真宗と福音主義神学 仏教とキリスト教の対話』I（ハンス-マルティン・バルルト、マイケル・パイ、箕浦恵了編、2000年）、II（マイケル・パイ、宮下晴輝、箕浦恵了編、2003年）、III（ハンス-マルティン・バルルト、マイケル・パイ、箕浦恵了、門脇健編）、法蔵館。
9. Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.
Love Meets Wisdom. A Christian Experience of Buddhism, Orbis Books, 1988.
Fire & Water. Basic Issues in Asian Buddhism and Christianity, Orbis Books, 1996.
10. Paul Knitter, *Without Buddha I Could not be a Christian*, Oneworld, 2009.
11. 古屋安雄『宗教の神学——その形成と課題』ヨルダン社、1985年。
12. John Hick, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.
13. 野呂芳男『キリスト教と民衆仏教——十字架と蓮華』日本基督教団出版局、1991年。
14. 大村英昭『死ねない時代——いま、なぜ宗教か』有斐閣、1990年。
大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典『ポスト・モダンの親鸞——真宗信仰と民俗信仰のあいだ』同朋社、1990年。
15. 山折哲雄『仏教民俗学』講談社学術文庫、1993年。
16. Richard Gombrich & Gananath Obeyesekere, *Buddhism transformed: religious change in Sri Lanka*, Princeton University Press, 1988. (島岩訳『スリランカの仏教』法蔵館、2002年。)